

## 花眼鏡

近頃はやりのものに百円ショップがある。私が割に行きつけにしていた郊外型の書店が店仕舞をしてしまい、ちょっと不便になったなと思っていたら、ここも百円ショップに衣替えしてしまった。女房のお供で出かけていくスーパーでも、ワンフロアがすっかり百円ショップになっていて、店には悪いがヒマつぶしにはもって来いの場所になっている。

といっても店から手ぶらで出る事はない。あまり安いので、さほど必要のないものでもついつい手を出して買ってしまふ。それにしても何でこう安いのだろうと不思議になるものもある。音楽CDロシア民謡集百円、壁掛時計百円なんての一体どうしてと店に聞きたくなる。

気に入ったものに老眼鏡百円がある。老眼鏡というのは無くなり易いものだ。近眼鏡のように常時かけているものではないので、ついつい置き忘れる。私が初めて買った老眼鏡は初の外国旅行の折、旅先で不便があっては困ると思って検眼してもらった注文品だが、旅に出て三日目に飛行機の中に忘れてきてしまった。以来二十年近く、彼は欧州の旅からまだ戻って来ない。以来私は既製品の眼鏡で間にあわせているが、年に一個くらいは失くしている。

注文すれば一万円では済まぬだろう。百円ショップなら、百個買える。デザインも十種以上ある。この間、五個まとめて買って来た。居間、寝室、仕事机の上、カバンの中など、あちこちに置くようにした。百円眼鏡は中国製である。中国の工場から出荷する原価はいくらだろう。せいぜい十円位だろうか。

ところで、中国では老眼などというイヤな言葉は使わず、花眼というのだそうだ。札幌在住の医師で詩人の嵩文彦さんがこれを調べていらっしやって、私も教わった。

たった百円で私の老眼は、美しい花眼に変わる。どちらも中国のおかげということになる。その花眼鏡を使ってこの文も書いた。